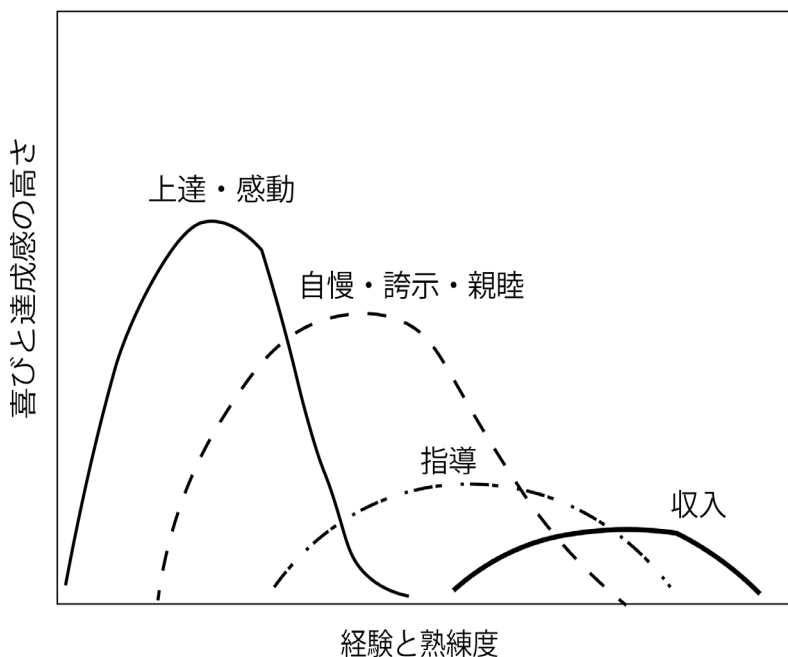


上達する喜び

私が釣りとバードウォッチングを好んでいることについては、このホームページでも紹介しているが、このほか囲碁、将棋、麻雀、離島めぐり、劇場での芝居、香港映画、韓流ドラマなどを楽しんでいる。小説を読んだり書いたりするのも趣味の一つである。過去には、スキー場や英会話学校に通い、現在では文学のセミナーに参加している。

趣味の楽しさは、あることを初めてからしだいに上達することにあるのは、言うまでもない。誰でも初心者から始めるのであるから、経験していくうちに上達する。たとえばスキーなら、転ばずに滑ることから始めて、ボーゲン、パラレルができるようになり、滑る速度も、攻略できる斜面の難易度も増していく。しかし、あるレベルになると、上達の速度は遅くなり、上達する喜びは減っていく。魚釣りならば、はじめはイワナ一匹釣れただけで喜び、しだいに釣果が上がって嬉しくなるが、やがて大物を釣ったり、数多く釣ったりしないと満足できなくなる。



上達にともなって喜びや感動が増していく一方で、いつまでたっても上達しないと、おもしろくなくなって、止めてしまうかもしれない。途中で挫折する割合は、その趣味がどれだけ技能を要するかに依存する。楽器を演奏するような趣味では、簡単には上達しない。

趣味の中には、アイドルを追っかけたり、スポーツを観戦したり、特定の食べ物を食べ歩いたりするものも含まれる。これらはそれほど技能を要しないので、始めてすぐに楽しむことができるが、上達する喜びはそれほど大きくないので、飽きやすいかもしれない。それでも、その趣味を楽しむ回数が増えるにつれて経験と知識は増していくので、その趣味なりの楽しさは持続するかもしれない。図では、上達・感動による喜びは減退するとしたが、いつまでも感動を覚えることができれば幸せである。

自慢・誇示・親睦の楽しさ

趣味において上達していくと、さまざまな楽しさが生まれてくる。とくに成果があがると、それを他の人にみとめてもらいたいと思うだろう。魚釣りであれば、魚拓や写真をとって人に見せたり、SNS に挙げてイイネをもらったりすることで満足する。鳥の写真撮るのも同じことであり、写真を示すことによって、その技術が高いことを誇示する。そこまでなくても、友人や家族に見せて褒めてもらうのは喜びである。あからさまに自慢すると嫌われることもあるので、釣れた魚を知人や隣人にあげて、喜んでもらう。骨董収集であれば、来客にさりげなく見せるだけでも満足できる。サーフィンやスノーボーディングなら、人の見ているエリアで格好よく演じれば誇りになる。カラオケならば、一人で歌うよりは人に聴いてもらいたい。自慢と言うと悪い意味にとらえられがちであるが、別の言い方をすれば自己アピールであり、承認欲求の充足である。誰でも生きていくうえで、自分が何かを達成し、それを他人や社会にみとめてほしいと思っている。それは健全なことである。

しかし、すべての趣味がすべての人に自慢できるわけではない。とくに釣りのような収穫物がない場合、たとえば、むずかしいアングルから撮影した鉄道写真や珍しい岩石、盆栽などをふつうの人に見せても、綺麗ですねと言われるくらいで、その価値を理解して褒めてもらえるはずがない。そこで次に重要なのは、仲間や同好会をつくって、そこで評価されることである。現在では、いかなる趣味についても同好会はあり、そこで仲間を見つけることができれば、互いに褒め合って満足できるだろう。仲間同士で趣味について話し合う中で、より深い知識を披露したり、他人のまちがいを指摘したりすることができれば、誇らしい気持ちになるはずである。

囲碁・麻雀・戦闘ゲームなどでは、そこでの戦績によって決められるステータスが重要であり、それを上げることによって上達と自慢の両方を満たすことができる。囲碁や将棋のほかに、習字やそろばんでは段や級があり、実力のレベルが認定される。さらに囲碁や将棋であれば、それぞれのクラブや市町村レベルの大会から県大会、さらに地方大会や全国大会までさまざまなレベルのものがああり、よい成績を収めることができれば、表彰されたりマスメディアにとりあげられたりする。同じことは、写真、絵画、スポーツにもあてはまる。全国で優勝するのはむずかしいが、学校や地域の大会で勝つことができれば励みになる。

趣味には一人で楽しむものもあれば、仲間と楽しむものもある。基本的に一人で楽しむ趣

味には、カメラ、絵画、骨董収集、盆栽、読書、手芸、料理、ドラマの鑑賞などがある。一人でもできるが、仲間と楽しむことができる趣味には、釣り、バードウォッチング、楽器演奏、ジョギング、スキー、スノーボーディング、サーフィン、カラオケ、ゲーム、飲酒、ダンス、コスプレ、旅行、温泉巡り、キャンプ、ツーリング、登山などが含まれる。これらに対して、一人ではむずかしいものとしては、麻雀、囲碁、将棋のほか、野球、サッカー、テニスなどのスポーツがあるが、近頃はネットゲームとして一人でも楽しむことができるようになった。

同じ趣味を共有する中で、仲間ができれば親睦の楽しさを味わうことができるかもしれない。とくに体を動かす趣味で互いに汗をかけば、勝ち負け以上に楽しい時を過ごすことができる。マーじゃんや囲碁・将棋では、勝負も重要だが、好きな相手と同じ時を過ごす楽しさがある。飲食店や居酒屋、銭湯・温泉、スポーツクラブなどに参加し続けると、やがて場の雰囲気馴染み、仲間ができていくのだが、これも親睦の効果である。自慢・誇示と親睦は表裏一体のことが多い。同じ仲間と集う場で、あるときは自慢し、あるときは自慢され、互いに褒めたり批判したりする中で、親睦が生まれると考えられる。

初心者を指導する楽しさ

趣味を続けていけば経験者となり技術も長けてくるので、初心者に対して助言・指導するようになる。上に挙げた自慢と区別がつかないこともあるが、助言や指導には、それ自体、自分の方が優れていることを確認する意味があり、行なう側は嫌な気持ちにはならないであろう。たとえば、バードウォッチングの会に参加すると、ベテランの会員がいちはやく珍鳥を見つけて、やさしく教えてくれる。魚釣りでは、先輩が道具や釣り方を丁寧に教えてくれ、初心者でも釣れるように指導してくれる。

助言や指導は初心者が向上するうえで早道ではあるが、度を越した言い方は反発を招く。「こうした方がいいよ」くらいの言い方ならいいけれども、「・・・だからだめなんだ」といった強い言い方は嫌われる。初心者を見下すとマウンティングと言われる。知識の乏しい若者にあれこれと説明すると、マンスプレイングだと批判される。だから、何も言わずに同行して手助けするくらいが、ちょうどよいかもしれない。

初心者は先輩に教えてもらうことによって上達する喜びと、指導される辛さを天秤にかけて、同行する先輩を選ぶことになる。とくに趣味を親子で共有する場合、親は子にうるさく指導するので嫌われることが多い。誰にもとやかく言われたいくなければ、一人でやるのもよいだろう。近頃はさまざまなソフトやアプリがあるので、他人と接することなく学ぶこともできるようになった。AIを利用した学習も効果があるはずである。

ただし、見知らぬ自然の中で何かをしようとするれば、誰かに教えてもらうことは必要である。その点で、プロに頼んでガイドしてもらうのも、よい方法である。初めて登る山、初めて下るカヌー、見知らぬ土地でのバードウォッチングなどでは、ひとりよがりの活動は危険

かもしれない。

プロとして収入をえる

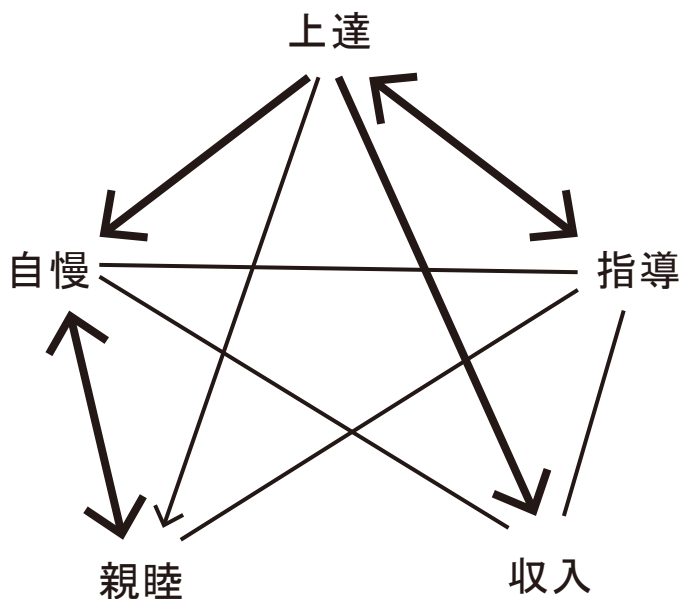
趣味でもスポーツでも、さらに経験を積んで上達すると、それによって収入をえることができるかもしれない。アユ釣りでは、釣ったアユを買い取ってくれる場所があり、ちょっとした小遣い稼ぎになる。バードウォッチングに長けていれば、ガイドとして働けるかもしれない。そのほか、インストラクターやプロとして収入をえることができれば、その趣味を始めたときのような新鮮な喜びは感じなくても、充実感を覚えるはずである。近年では、YouTubeなどに動画を挙げて、広告収入をもらうこともできるようになった。DIY、手芸、料理、陶芸、畑づくりなどでは、作り上げた作品あるいは作物を収入とみなすことができる。

このレベルに達すると、しだいに趣味の目的が上達や自慢ではなくて、利益追求になっていくかもしれない。そうなると、利益につながらないことには興味をもてなくなってしまう。よく趣味を仕事にしていると、さぞかし楽しいでしょうね、と言われるだろうが、本人にとっては趣味ではなくて仕事なので楽しくないかもしれない。釣りガイドは、その場所を知り尽くしているのだから、自分が釣りをしても楽しくないであろうし、客が釣れないと失敗したような気になるだろう。バードウォッチングのガイドも同様である。したがって、プロとして収入をえる道においても、初めは趣味と実益を兼ねているので楽しいが、しだいに飽きてくるとともに、うまくガイドできないことに神経を使うなどして嫌になるかもしれない。

趣味と資格や修行は根本的に異なる。趣味は楽しみを主眼とするけれども、資格をえたり修行したりするのは、それによって収入をえて生計を立てることを最終目的にする。したがって、後者ではそれだけ本気にならないと失敗することになるけれども、趣味の延長でプロになることができれば幸せである。遊びのつもりでも才能が開花してプロになる道は、芸術分野ではむずかしいが、アウトドア活動やその他人気のある趣味では、近年つぎつぎに開かれている。

5つの効能の関係

上達、自慢・誇示、親睦、指導、収入と異なる効能があることによって、趣味は無限の喜びをもたらしてくれると言えるだろう。これらの効能は、経験と上達のレベルによって変わっていく。図にあらわしてみると、まず初めに誰でも上達の喜びを味わえる。ただし技能を要する難易度の高い趣味、たとえば楽器の演奏や語学の習得であると、上達せずに挫折することが多いかもしれない。むずかしい技術は上達した場合の喜びが大きい、それが嫌な場



合には、誰でも楽しめる趣味から始めればよい。

上達の喜びに飽きたころには、次に自慢したり、他人にみとめられたりする喜びを味わうことができる。上達が止まっても、技量が高ければ、さまざまな形で評価されるはずである。上達がピークに達してからしばらくは、評価される喜びも加わって、趣味から享受する満足感は最大になるはずである。何かを収集する趣味では、長く続けることによって収集物は増えていくので、それが成果として誇らしくなる。

同じように趣味を共有する仲間ができれば、親睦の楽しさを味わうことができる。冗談を言い合ったり、趣味について語り合ったりする中で、仲間との絆は深まっていくが、自己主張や自慢がすぎると嫌われるので注意しよう。

次にえられるのは指導する喜びであり、そのためには趣味を始めて間もない友人や弟子が必要である。うるさいことを言って嫌われないようにしつつ、指導が効果を上げて友人や弟子の技量が上がれば、それ自体喜ばしい。師匠はたまには弟子に負けてあげることも必要かもしれない。弟子が上達したら、同格の愛好者として同じ目線で楽しむことができるだろう。勝つときは勝ち、負けるときは負けてバランスをとれば、関係が悪化することはない。趣味のサークルや同好会では、常連のベテランがボスとして君臨することがある。ボスと仲良くすることも大事ではあるが、うるさいと思ったら退会するのがよいだろう。

趣味が収入をもたらす場合、釣ったアユを売ったり、採った山菜を直売所にもっていったりする程度なら誰でもできるが、インストラクターとなると、かなりの技量が必要である。さらに、その道のプロとして、それだけで食っていくのは至難の業であり、たとえば釣りについていえばごくわずかの名人しか見当たらない。しかし、そこまで考える必要はなく、好きなことをして多少家計の足しになればそれでよいと思う。

趣味の効能を5つに分けて、相互関係を図示してみると、上達がほかの効能をもたらすこ

とが多いものの、親睦については上達しなくても味わうことができる。自慢・誇示と親睦はどちらも仲間がいないと感じられない点でつながっている。一方、親睦とは異なる効能として指導と収入があり、どちらも経験を積み上達しないと成し遂げることはできない。

趣味を1つにしぼって、その道を究めるのも、一つの生き方であるけれども、いくつもの趣味をもち、気分に応じて楽しむのもよいと思う。私の魚釣りについて言えば、子供のときのフナ釣りに始まり、溪流釣り、アユ釣り、サクラマスルアーフィッシング、海の投げ釣り、磯釣りに進み、近頃は船に乗ってライトジギングに挑戦している。一つの釣りに飽きても別の釣りがあるので、いつまでも飽きることがない。飽きたと思っても、久しぶりにやってみると思いのほか楽しめることもある。同じように、いくつもの趣味をそのつど楽しむようになれば、一年を楽しく過ごすことができる。

どの趣味も上達しなければならないということはない。趣味における4つの楽しさを十分に味わうためには、さまざまな熟練度の趣味をいくつも持っているといい。逆に、すべての趣味でプロ級になって収入もえられるとなると、初心者の頃のワクワク感は失われるだろう。

趣味は同時に楽しむこともできる。私は春と秋の渡りの時期に離島に行き、バードウォッチングを楽しみながら、朝晩には海釣りを楽しむ。宿では新鮮な魚介類を味わい、夕食後はインターネットで囲碁や将棋を打つ。ある趣味に挫折したり、上達しないことに嫌になったりしたら、別の趣味に切り替えて気分転換をはかることも必要だと思う。趣味に応じて仲間をつくることができれば、それだけ楽しさは増すだろう。

おわりに

趣味の反対語は何かと考えると、おそらく「仕事」ではないかと思う。そのために、趣味というと、しばしば仕事をしないで遊んでいるかのように見られることが多い。しかし、一日中仕事ばかりしていると、誰でも退屈を感じるだろう。自営業の人でなければ、会社やその他の組織で働いて給料をもらう。そこでは、嫌な上司ややりたくない仕事に向き合うこともあり、ストレスを感じることも多いかもしれない。酒を飲んでうさを晴らす道もあるけれども、健康を害するおそれがある。その点、趣味にはまることは気分転換をして明日の活力を生む原動力になる。

仕事では、嫌なことも我慢しなければならないが、趣味の世界では何をしようと、いつ止めても自由である。同好会やクラブについても、嫌になったら行かなくてよい。趣味の上での人間関係はいつでも切断することができる。避けなければならないのは惰性で趣味を続けることであり、ワクワクしなくなったらすぐに止めるべきである。一方で、ある趣味を始めてなかなか上達しないからといって悲観する必要はない。初心者こそ、これから上達する喜びが待っていると考えるべきであり、上達以外の楽しみがあることを知るべきである。

趣味の中にはスポーツも含まれる。しかし、スポーツは仕事としても行われるし、学校で

は体力を鍛える目的でも行われる。授業で無理やり長距離走や遠泳をさせられるのは拷問のようなものであり、趣味ではない。高校や大学の名門校では、将来プロ選手になるために、厳しいトレーニングが行われるが、これも趣味というよりは勉強や仕事に近い。

健康のために運動する人も多い。ジョギング、散歩、テニス、水泳など、好きでなくてもダイエットや高血糖、高血圧を改善するために運動するのは、趣味とは言いがたい。一方で、遊びで野球、サッカー、ゴルフなどのスポーツをするのは楽しみであり、趣味である。趣味か趣味でないかは、本人がそれを好いて楽しんでいるかどうかによる。そして、他人が何かを好きでやることについて、とやかく言うてはいけない。誰もやっていないことを自分だけの趣味として始めるのもおもしろいかもしれない。

ある趣味の世界では、さまざまな人間関係が生まれるが、ある趣味と別の趣味の間でも、協調や対立が生じるかもしれない。この問題については、あらためて考えてみたい。この論考がある趣味を始めようとしたり、ある趣味に嫌気を感じたりする人に役立てば幸いであり、仕事に疲れている人にも読んでもらいたい。